介護労働

NCCUが春闘の賃上げ状況や就業意識実態調査の結果を発表

TOPICS トピックス 1

ヘルパーなど介護従事者約六万六〇〇〇人を組織するUAゼンセン傘下の日本介護クラフトユニオン（NCCU、陶山浩三会長）は、八月四日に記者会見を開き、二〇一五春闘の賃上げ状況や二〇〇七年以降、毎年三月に実施している「就業意識実態調査」の結果等を公表した。

時給制で昨年比四二円増を獲得

介護従事者の賃上げをめぐっては、政府が二月六日、二〇一五年度から三年間の介護報酬について全体で二・二七％引き下げることを決定する一方、介護職員処遇改善加算（以降、処遇改善加算）が一人当たり月額一万二〇〇〇円程度、増額される中での取り組みとなり、その難しさが指摘されてきた。この間の妥結状況について経過説明した、久保芳信・NCCU副会長は「介護報酬が減る分、事業収益も落ち込むため、賃下げにつながらないかが危惧される状況下での取り組みとなった」などと説明した。

中間集計結果によると、八月四日時点で、三八分会（五九法人をグループ系列にまとめるなどした活動単位）中、二一分会が妥結に漕ぎ着けている。単純平均は、月給制組合員が二二〇七円＋処遇改善加算六五一六円（計八七二三円）に対し、時給制組合員が九・三円＋同四一・八円（計五一・一円）。同分会の昨年の妥結実績は、月給制組合員が三〇八〇円、時給制組合員が九・一円だったので、月給制組合員で五六四三円増、時給制組合員で四二円増にのぼる回答を引き出した計算になる。

一時金については、三八分会中二二分会で妥結。単純平均で、月給制組合員は二〇万二五〇〇円、時給制組合員では三万八七五六円となっており、昨年（同順に二二万八八七二円、三万三四五円）対比で、月給制組合員が約二・六万円下回る一方、時給制組合員は約五〇〇〇円上回っている。こうした結果を踏まえ、久保副会長は「少なくともこれまでに妥結したところでは、離職率の高まり等で人手不足感が強まっていることなどを背景に、大きな前進がみられたようだ。ただ、例年より法人側からの回答に時間がかかっており、交渉が難航していることは否めない」などと指摘した。

月給制の八割超にストレスあり

一方、今年の「就業意識実態調査」では、初めて介護従事者のメンタルヘルス状況等についても取り上げた。調査は、月給制・時給制の組合員各三二五〇人を対象に実施。月給制組合員については二一六五人（六六・六％）、時給制組合員では一四一二人（四三・四％）を回収した。

属性は、月給制組合員の六九・四％が女性で、年齢層は多い順に、四〇歳代（二八・九％）、三〇歳代（二四・七％）、五〇歳代（二三・八％）など。主に従事している職種は、多い順に入所系介護員（一八・一％）、ケアマネジャー（一三・〇％）、訪問系介護員（一〇・六％）、通所系介護員（九・〇％）、サービス提供責任者（八・八％）などとなっている。これに対し、時給制組合員は八六・四％が女性。年齢は四〇歳代（三一・三％）、五〇歳代（二五・二％）、三〇歳代（一八・四％）など。職種は、訪問系介護員（二九・三％）と通所系介護員（二〇・二％）、入所系介護員（一九・六％）で七割弱を占める。

それによると、「職場でストレスを感じるか」との問いに対しては、月給制組合員の四人に一人以上（二六・三％）が「とても感じる」とし、半数以上（五四・六％）が「ときどき感じる」と回答した。職種別にみると、「とても感じる」割合は通所系管理者（三九・四％）や准看護師（三七・五％）、福祉用具専門員（三二・一％）などで高い。一方、時給制組合員では一二・四％が「とても感じる」とし、五六・一％が「ときどき感じる」と回答。とくに生活相談員で、「とても感じる」割合が三八・五％と高くなっている。

職場でストレスを「（とても・ときどき）感じる」者を対象に、その原因を尋ねると（三つ以内で複数回答）、月給制では「仕事量」（四三・三％）がもっとも多い。次いで、「体への負担」（四〇・七％）や「売上に対する重圧」（二〇・一％）、「正しいケアが行えているかという不安」（一八・八％）、「休みが取れない」（一七・二％）など。一方、時給制では「体への負担」（四八・五％）がもっとも多く、これに「仕事量」と「正しいケアが行えているかという不安」がともに二六・三％で続く。以下、「同僚との関係」（一九・七％）、「利用者との関係」（一八・五％）などとなっている。「最近、メンタルヘルスに不調を感じたことがあるか」を尋ねると、月給制組合員の半数以上（五一・一％）と時給制組合員の三分の一以上（三四・九％）が「あった」とした。

四四・六％が介護ロボットを利用したい

ストレスの原因に「体への負担」もあがるなか、NCCUでは腰痛と介護ロボットについて追加のアンケートを行った。組合員を対象としたネット調査で、回答者は三二七人。それによると、五六・九％が腰痛を抱えるなか、介護ロボットを業務で使ったことがある割合は〇・三％にとどまったものの、「負担の大きい介助が楽になる」「腰痛の予防になる」といった期待から、四四・六％が「今後、利用したい」と回答した。

（調査・解析部）